

日韓両言語における 「否定一致現象」について

朴 江 訓

1. はじめに

従来、日韓両言語の多くの研究において、以下の(1)は否定極性項目 (Negative Polarity Item: 以下、NPIとする) として分析されてきた。

(1) 現代日本語・韓国語における NPI の種類

日本語：韓国語

- a. 「しか」: 「pakk-ey」¹
- b. 「Indeterminate- も (以下、「不定語も」²とする)」: 「不定語 to」
誰も: amwu-to、何も: amwukes-to、どこへも: amwutey-to
- c. 「1-Classifier- も (以下、「1CL も」とする)」: 「1CLto」
一人も: hansalam-to、一つも: hana-to など

NPIとは統語的に必ず文否定辞と共起しなければならない表現をさす (Kato (1985), Aoyagi & Ishii (1994), Sells (2001), Kuno & Whitman (2004) など)。この特徴を「しか /pakk-ey」と「誰も /amwu-to」が用いられた例文でみると次のようになる (以下、下線部分はNPIであることを示している)。

- (2) a. *太郎しかご飯を食べた。
b. 太郎しかご飯を食べなかった。
- (3) a. *talo pakk-ey pap-ul mek-ess-ta.
太郎 しか ご飯を 食べた
「太郎しかご飯を食べた。」
b. talo pakk-ey pap-ul mekci-anh-ass-ta.³
太郎 しか ご飯を 食べなかった
「太郎しかご飯を食べなかった。」
- (4) a. *誰もご飯を食べた。
b. 誰もご飯を食べなかった。

- (5) a. *amwu-to pap-ul mek-ess-ta.
誰 も ご飯を 食べた
「誰もご飯を食べた。」
- b. amuw-to pap-ul mekci-anh-ass-ta.
誰 も ご飯を 食べなかった
「誰もご飯を食べなかった。」

(2a)-(5a)はNPIが肯定文に現れるため、不適格な文になる。

本稿の目的は、前述の(1)に挙げられた日韓両言語の表現の性質を生成文法的なアプローチから明らかにすることである。日韓両言語の多くの先行研究において、NPIとして分析されてきた(1)の表現は(「しか」を除いた)すべてが否定一致項目(Negative Concord Item: 以下、NCIとする)として分析されるべきであることを指摘する。

本稿は五つの節から構成されている。第2節において、先行研究の概観及び問題点の指摘をおこない、本稿の立場を述べる。第3節においては、本稿の主張の検証を五つのテストに基づいておこなう。第4節において、「多重否定一致現象」について述べ、本稿の主張のさらなる証拠を提示する。最後に、結論と今後の課題について述べる。

次節では、日韓両言語における先行研究とその問題点を概観し、本稿の立場を述べる。

2. 先行研究

本節では、先行研究において前述の(1)に対し、二つの異なる分析、つまり「NPIとしての分析」と「NCIとしての分析」があることを概観し(2.1節)、それぞれの問題点を指摘する(2.2節)。そして2.3節において、本稿の立場を述べる。

2.1. 「NPIとしての分析」と「NCIとしての分析」

日韓両言語の先行研究によって、(1)は「NPIとしての分析」と「NCIとしての分析」、二つの異なる立場に分かれている。本節では、それぞれの分析について概観する。

まず、「NPIとしての分析」について概観する。NPIの研究は英語の「any」の認可に関しておこなわれた Klima (1964) 以来、さまざまな言語において統語論的・意味論的・語用論的な観点からおこなわれている。その中で、日本語と韓国語の個別言語のNPIの先行研究もたくさんあり、統語的な立場をとる先行研究では、英語の「any」の認可の分析にしたがって主に以下のような主張がなされている。

- (6) NPIはLFにおいて否定辞(Neg)によってc-統御されなければならない(Kawashima & Kitahara (1992), Kuno (1995), Kato (2000) (2002) など)。⁴

すなわち、上の(2b)の「しか」、(3b)の「pakk-ey」、(4b)の「誰も」、(5b)の「amwu-to」

が用いられた文は LF において否定辞によって c-統御されているとされる。⁵

次に、「NCIとしての分析」について述べる。否定一致 (Negative Concord) とは、Haegeman & Zanuttini (1991) (1996) 以来、盛んに研究がおこなわれている現象で、否定の意味を担う表現が文中に複数存在するにもかかわらず、二重否定にはならず単一の否定しか意味しない現象をさす (渡辺 (2005: 110))。次の文をみてもらいたい。

- (7) ..da Valere niemand nie kent.
that Valere nobody not know
“..that Valere doesn’t know anybody” (渡辺 (2005: 110, (8)))
- (8) ..da Valere nie niemand kent.
that Valere not nobody know
“..that Valere doesn’t know nobody” (同: (9))

上の(7)と(8)は西フラマン語 (West Flemish) の例である。(8)においては、否定の意味を担う表現「niemand (nobody)」と「nie (not)」が二つあるにもかかわらず二重否定にならない。一方、(8)は、(7)と比べて「niemand」と「nie」の語順が異なるだけであるが二重否定になる。(7)と(8)の相違点の理由として、Haegeman (1995)と Haegeman & Zanuttini (1996) は以下のような統語的特徴(9a)と意味的特徴(9b)の二つの操作を主張する。

- (9) a. The Neg-Criterion
i. A Neg-operator must be in a Spec-head configuration with an X^0 [Neg];
ii. An X^0 [Neg] must be in a Spec-head configuration with a Neg-operator.⁶
b. Neg-Factorization
 $[\forall x \text{ NOT}][\forall y \text{ NOT}] \text{ NOT} \rightarrow [\forall x][\forall y] \text{ NOT} (= \text{NOT} [\exists x y])$

すなわち、(7)において、Haegeman & Zanuttini は否定辞の移動を否定演算子の移動として捉え、否定演算子が移動して否定辞と指定部—主要部一致を成立させることにより否定一致が成立すると主張している。これに対し、(8)は否定演算子の移動がおこなわれないため、否定一致が成立せず二重否定になると説明する。さらに、彼らは(7)において統語的操作がすべて終了した後におこなわれる否定因数分解 (Neg-Factorization) という解釈操作を仮定している。この操作を用いて、複数の文否定素性のうち、一つを残して他の文否定要素はすべて取消される。Haegeman & Zanuttini は、これら一連の仮定により、当該の文が単独否定文と解釈されるという事実を説明している。

Haegeman & Zanuttini の研究にならい、次に挙げる先行研究は「しか /pakk-ey」「不定語も /不定語 to」に関して、「NCIとしての分析」をおこなっている。

- (10) a. 日本語：先行研究における「NCIとしての分析」
 i. Nishioka (2000) → 「しか」・「不定語も」
 ii. Furukawa (2001) → 「しか」・「不定語も」
 iii. Watanabe (2004)、渡辺 (2005) → 「不定語も」・「1CLも」
 b. 韓国語：先行研究における「NCIとしての分析」
 i. Kim (2005) → 「不定語 to」

2.2. 先行研究の問題点

2.1節において、日韓両言語の先行研究において、(1)をそれぞれ異なる立場から分析していることを概観した。本節では、両立場の問題点を指摘する。

まず、「NPIとしての分析」の問題点を述べる。前述したように、日韓両言語におけるNPIの研究はKlima (1964)における英語のNPI「anyone」「anything」「anywhere」など（以下、「any類」とする）の分析をそのまま日韓両言語に適用したものである。しかしながら、英語の「any類」と日韓両言語の「不定語も/to」が必ずしも一致するわけではない。以下の例を用いて英語の「anything」と日本語の「何も」/韓国語の「amwukes-to」とを比べてみよう。

- (11) a. Have you seen anything?
 b. *何も見ましたか?
 c. *amwukes-to po-asssupni-kka?
 何 も 見ましたか
 「何も見ましたか？」
- (12) a. If John steals anything, he'll be arrested. (Watanabe (2004: 562, (8))
 b. *ジョンが (もし) 何も盗んだら、逮捕されるでしょう。 (同：(9))
 c. *John-i (manil) amwukes-to humchin-da-myen, cheyphotoyl kesi-ta
 ジョンが (もし) 何 も 盗ん たら 逮捕される ことだろう
 「ジョンが (もし) 何も盗んだら、逮捕されるでしょう。」

「anything」は(11)のような疑問文と(12)のような条件文において生じるのに対し、日本語の「何も」と韓国語の「amwukes-to」は生じない。⁷

また、Nam (1994)とChung & Park (1997)は韓国語において、「Multiple NPI構文」は許されないとする。例えば、Nam (1994)は韓国語の「pakk-ey」と「不定語 to」は「最強NPI (Strongest NPI)」であるため、⁸単一の否定辞の下では一つのNPIしか許容されないと説明している。しかしながら、次の(13)において、「Multiple NPI構文」は問題なく許容される。

- (13) a. amwu-to amwukes-to mek-ci anh-ass-ta.
誰 も 何 も 食 べ な っ た
「誰も何も食べなかった。」
- b. yeki-nun w-uli-pakk-ey amwu-to eps-ta. (Kaist 1536) ⁹
こ っ こ は 私 々 ち し か 誰 も い な い
「ここは私たち以外誰もいない。」
- c. kemi-pakk-ey amwukes-to eps-ess-ta. (Kaist76)
クモ し か 何 も い な っ た
「クモ以外何もいなかった。」
- d. talo-pakk-ey amwukes-to mek-ci anh-ass-ta. (Sells (2001: 8, (12a))
太 郎 し か 何 も 食 べ な っ た
「太郎だけ何か食べ、他の人は何も食べなかった。」

(13a)は「不定語 to」の「amwu-to」「amwukes-to」が⁸、(13b-c)は「pakk-ey」と「不定語 to」が単一の否定辞の下で共起しているが、いずれも適格な文になる。

次に、「NCIとしての分析」の問題点を指摘する。前述したように Nishioka (2000) と Furukawa (2001) は「しか」と「不定語も」が NCI であるという共通の主張をしている。彼らが主張するように「しか」と「不定語も」が NCI であるならば、単一の否定辞が含まれる文中に「しか」と「不定語も」が共起しても不適格にならないはずである。しかしながら、下記の(14)は不適格な文である。

- (14) a. *誰も「Aspects」しか読まなかった。 (Kato (1985: 155, (45)))
b. *ジョンしか何も食べなかった。¹⁰ (Aoyagi & Ishii (1994: 301, (17a)))
c. *ここは私たちしか誰もいない。
d. *クモしか何もいない。

事実、多くの先行研究において「しか」に関して、以下のような制約が認められている。

- (15) 「しか」と他の NPI との共起制約
「しか」は単一の否定辞の下で他の NPI と共起してはいけない (Kato (1985)、Aoyagi & Ishii (1994)、茂木 (2004) など)。¹¹

また、韓国語において、Kim (2005) は「不定語 to」を NCI として分析すべきであると述べている。Kim (2005) の立場は妥当であると考えられるが、次節で示す NPI と NCI を区分する五つのテストと「pakk-ey」に関して何も触れていない点などを考慮すると韓国語の NCI についてまだ十分に考察がおこなわれていないと考えられる。

2.3. 本稿の立場

本稿は日韓両言語において、(1)は(「しか」を除いて)NCIとして分析されたのが妥当であると指摘する。そして、日本語の「しか」は先行研究と異なってNCIではないという点、さらに韓国語の「pakk-ey」、「不定語 to」、「1CLto」はNCIであるという点を主張する。

前節では事実観察をしたのみで、「しか」がNCIではないとは議論していない。したがって、次節では本稿の主張を裏付ける根拠としてNPIとNCIを区別するテストを示す。

3. 検証

本節では「不定語も /to」「1CLも /to」「pakk-ey」がNCIであることを五つのテストを用いて検証する (Vallduvi (1994), Giannakidou (2000))。

VallduviはCatalan語とスペイン語においてNPIとNCIを区別できるテストを以下のように提案している。

(16) Vallduvi (1994) によるNPIとNCIの相違点

表現が…	NCI	NPI
① 否定文ではない文に現れるか否か	現れない	現れる
② 主語位置に現れるか否か	現れる	現れない
③ 「ほとんど」によって修飾されるか否か	修飾される	修飾されない
④ 問答として省略表現が現れるか否か	現れる	現れない

さらに、Giannakidou (2000) はNPIとNCIを区別する異なるテストを以下のように提案している。

(17) Giannakidou (2000) によるNPIとNCIの相違点

表現が…	NCI	NPI
同一節内条件が現れるか否か	現れる	現れない

日本語の「NCIとしての分析」に基づいたNishioka (2000), Furukawa (2001), Watanabe (2004) は前述の五つのテストを用い、それぞれの主張の裏付けをしている。本稿においても、これらのテストを「不定語も /to」「1CLも /to」「pakk-ey」にそれぞれ適用し、これらがNCIであることを主張する。

次節では、英語のNPIの「any類」とのコントラストを分かりやすく示すため、最初

に「不定語も /to」をみてから「1CL も /to」と「pakk-ey」の順で確認することにする。

3.1. 「不定語も」と「不定語 to」

この節では前述の五つのテストを用いて「不定語も」と「不定語 to」に用いてこれらが NCI であることをみる。まず、テスト①について観察する。

(18) ①否定文ではない文に現れるか否か

a. *何も見ましたか?

a'. *amwukes-to po-asssupni-kka?

何 も 見ました か

「何も見ましたか?」

a". Have you seen anything? (= (11))

b. *ジョンが(もし) 何も盗んだら逮捕されるだろう。

b'. *John-i (manil) amwukes-to humchinda-myen, cheyphotoyl kesi-ta.

ジョンが(もし) 何 も 盗ん だら 逮捕される ことだろう

「ジョンが(もし) 何も盗んだら逮捕されるだろう。」

b". If John steals anything, he'll be arrested. (= (12))

(11)と(12)で前述したように、日韓両言語における「不定語も /to」は英語の「any 類」と違って、否定文以外の文には現れない。したがって、(16)に基づいて、「不定語も /to」は NCI、「any 類」は NPI ということになる。そして、なぜ両者の間の差が生じるのかという問題に関して、本稿では NCI と NPI において認可子 (licenser) が異なり、NCI は NPI と違って否定辞のみによって認可されるからであると主張する。

次に、テスト②主語位置に現れるか否かについてみてみよう。

(19) ②主語位置に現れるか否か

a. 誰もジョンを批判しなかった。 (Watanabe (2004: 563, (10b)))

a'. amwu-to John-ul pipan-ha-ci anhass-ta.

誰 も ジョンを 批判 しなかった

「誰もジョンを批判しなかった。」

b. *Anybody didn't criticize John. (同: (10a))

(19a) (19a')において、「不定語も /to」とも主語位置に現れる。これに対し、(19b)の「anybody」は主語位置に現れにくい。¹²

次は、三番目のテストに関して観察する。

(20) ③「ほとんど」によって修飾されるか否か

- a. ジョンはほとんど何も食べなかった。 (同：(12b))
 a'. John-eun keuy amwukes-to mek-ci-anh-ass-ta
 ジョンは ほとんど 何も 食べなかった
 「ジョンはほとんど何も食べなかった。」
 b. *John didn't eat almost anything. (同：(12a))

(20a)(20a')において、「不定語も /to」とも「ほとんど /keuy」によって修飾される。これに対し、(20b)の「anything」は修飾されない。これについて Haegeman & Zanuttini (1996) は、NCIは全体量化表現 (universal quantifier) であるため、「ほとんど」によって修飾されると述べている。したがって、NCIである「不定語も /to」は「ほとんど /keuy」による修飾が可能で、NPIの「any類」は全体量化表現ではないため、「almost」による修飾は不可能である。

次は四番目のテストに関して観察する。

(21) ④問答として省略表現が現れるか否か¹³

- a. 質問：何を見たの？ 答え：何も。 (同：(13b))
 a'. 質問：mwu-ess-ul poass-ni? 答え：amwukes-to
 何 を見たか 何も
 「質問：何を見たの？ 答え：何も。」
 b. 質問：What did you see? 答え：*Anything. (同：(13a))

(21a)(21a')において、「不定語も /to」とも問答として省略表現が可能である。これに対し、(21b)の「anything」は不可能である。

次は、(17)の五つ目のテストの検証をおこなう。

(22) ⑤同一節内条件が現れるか否か

- a. *僕は [ジョンが誰も尊敬していると] 言わなかった。 (同：(14b))
 a'. *na-nun [John-i amwu-to conkenghakoiss-ta-ko] malha-ci anh-ass-ta.
 僕は ジョンが 誰も 尊敬していると 言わ なかった
 「僕はジョンが誰も尊敬していると 言わなかった。」
 b. I didn't say that John admired anyone. (同：(14a))

「不定語も /to」とも(22a)(22a')のように、否定辞と同一節内に現れないと非文になる。これに対し、「anyone」は否定辞と同一節内に現れなくても非文にならない。

以上、「不定語も /to」と「any類」に関してNPIとNCIを区別する五つのテストをおこない、日韓両言語の「不定語も /to」と英語の「any類」が違う振る舞いをすることを確認した。¹⁴しかしながら、先行研究において、前述の五つのテストそれぞれがNCIの

認可のメカニズムとどのように関わりを持つかが明らかにされていないという問題点が残されているが、次の節では、韓国語の「1CLto」が日本語の「1CLも」のようにNCIであることを示す。

3.2. 「1CLも」と「1CLto」

この節では前述の五つのテストを用い、日本語の「1CLも」と同様に韓国語の「1CLto」もNCIであることをみる。まず、①のテストについて検討する。

(23) ①否定文ではない文に現れるか否か

a. *一つも見ましたか？

a'. * hana-to po-asssupnik-ka.

一つも 見ました か

「一つも見ましたか？」

b. *ジョンが (もし) 一つも盗んだら 逮捕されるだろう。

b'. * John-i (manil) hana-to humchinda-myen cheypho-toyl kesi-ta.

ジョンが (もし) 一つも 盗ん だら 逮捕 されること だろう

「ジョンが (もし) 一つも盗んだら 逮捕されるだろう。」

両言語共に、否定文ではない文に「1CLも /to」は現れない。

次に、二番目のテストをおこなう。

(24) ②主語位置に現れるか否か

a. 一人もジョンを批判しなかった。

a'. hansalam-to John-ul pipan-haci-anhass-ta.

一人 もジョンを 批判し なかった

「一人もジョンを批判しなかった。」

(24)において「1CLも /to」両者ともに主語位置に現れる。

次に三番目のテストについて検討する。

(25) ③「ほとんど /keuy」によって修飾されるか否か

a. ジョンはほとんど一つも食べなかった。

a'. John-eun keuy hana-to mek-ci anh-ass-ta.

ジョンはほとんど 一つも 食べ なかった

「ジョンはほとんど一つも食べなかった。」

上記の例において「1CLも /to」とともに「ほとんど /keuy」によって修飾される。

次に、(16)の四番目のテストをおこなう。

(26) ④問答として省略表現が現れるか否か

a. 質問：何人を見たの？ 答え：一人も。

a'. 質問：myech myeng-ul po-assni? 答え：hansalam-to.

何 人 を 見たか 一 人 も

「質問：何人を見たの？ 答え：一人も。」

ここでは、両者とも問答として省略表現が可能である。

次に(17)の五番目のテストをおこなう。

(27) ⑤同一節内条件が現れるか否か

a. *僕は [ジョンが一つも食べた] 言わなかった。

a'. *na-nun [John-i hana-to mek-ess-ta-ko] malha-ci anh-ass-ta.

僕 は ジョンが 一つも 食べた と 言わ な かつ た

「僕はジョンが一つも食べたと言わなかった。」

(27)では両者とも否定辞と同一節内に現れないと非文になる。以上のテストから、(16)(17)に基づき、「1CLも/to」ともにNPIではなく、NCIであるといえる。

さらに、次節では「pakk-ey」について観察する。

3.3. 「pakk-ey」

本節では上記の五つのテストを用いての特性について「pakk-ey」を確認する。まず、一つ目のテストを用いる。

(28) ①否定文ではない文に現れるか否か

a. *talo pakk-ey sakwal-ul mek-esssupni-ka.

太郎 しか りんご を 食べましたか

「太郎しかりんごを食べましたか。」

b. *talo pakk-ey meknunta-myen ce-to mekkeysssupni-ta.

太郎 しか 食べ たら 私 も 食べます

「太郎しか食べたら私も食べます。」

「pakk-ey」は上述の(28)のように否定文ではない文には現れない。

次に二つ目のテストをおこなう。

(29) ②主語位置に現れるか否か

talo pakk-ey sakwal-ul mek-ci anh-ass-ta.

太郎 しか りんごを 食べなかった

「太郎しかりんごを食べなかった。」

(29)において、「pakk-ey」は主語位置に現れる。

次に三番目のテストを検討する。

(30) ③「ほとんど」によって修飾されるか否か

hoyey-nun keuy yechat-ul pakk-ey o-ci anh-ass-ta.

会議には ほとんど 女性たちしか 来 なかった

「会議にはほとんど女性たちしか来なかった。」

(30)において、「pakk-ey」は「keuy」によって修飾され、問題なく容認される。

次に四番目のテストを「pakk-ey」にあてはめてみる。

(31) ④問答として省略表現が現れるか否か

質問：hoyuycang-ey-nun cenwen wassnun-ka?

会場 には 全員 来た か

答え：(aniyo) kimpwucang pakk-ey.

(いいえ) 金 部長 しか

「質問：会場には全員来たのか？ 答え：(いいえ) 金部長しか。」

(31)において、「pakk-ey」は問答として省略表現が可能である。

最後に五つ目のテストをおこなう。

(32) ⑤同一節内条件が現れるか否か

* na-nun [talo pakk-ey pap-ul mek-ess-ta-ko] malha-ci anh-ass-ta.

私は 太郎 しか ご飯を 食べた と 言わ なかった

「私は太郎しかご飯を食べたと言わなかった。」

(32)において、「pakk-ey」は否定辞と同一節内に現れないと不適格な文になる。

以上のNPIとNCIを区別する五つのテストに基づき、「不定語も/to」「ICLも/to」「pakk-ey」がNCIであると主張した。

では、(1)において、これらの要素と同類とみなされた「しか」も五つのテストに関して同様の振る舞いを示すのであろうか。Nishioka (2000), Furukawa (2001) は「しか」が上記の五つのテストにおいて、NCIの振る舞いを示すためNCIとして扱っている。しか

しながら、本稿では NCI であることを確かめるにはさらにもう一つ別のテストが必要だと主張し、そのテストの結果に基づいて「しか」は NCI ではないことを主張する。そのテストとは、「多重否定一致現象が現れるか」というものである。先行研究 (Haegeman & Zanuttini (1996), Watanabe (2004), 渡辺 (2005)) によると、NCI であれば「多重否定一致現象」が起きてもいいとされている。しかしながら、「しか」は「多重否定一致現象」が現れない。この点を考慮すると「しか」と「不定語も /to」「1CL も /to」「pakk-ey」とが区別されると考えられる。

次節において、「多重否定一致現象」と上記の表現の関係を観察し、「しか」は「不定語も /to」「1CL も /to」「pakk-ey」と違って NCI ではないことを考察する。

4. 多重否定一致

本節では「不定語も /to」「1CL も /to」「pakk-ey」が NCI であることを立証するさらなる根拠として「多重否定一致 (Multiple Negative Concord) 現象」があることを述べる。そして、NCI であれば、当該表現は (33) に示した特性を持たなければならないと主張する。

(33) NCI 同士は単一の否定辞の下で多重否定一致が可能である。

すなわち、NCI 同士は単一の否定辞の下で多重共起 (multiple occurrence) 可能ということである。以下、この特徴を「不定語も /to」「1CL も /to」「pakk-ey」が有するかどうかを検証する。¹⁵

- (34) a. 誰も何も食べなかった。 (Kato (1985: 154, (40)))
 a'. amwu-to amwukes-to mek-ci anh-ass-ta.
 誰 も 何 も 食べ なかった
 「誰も何も食べなかった。」 (=13a)
- b. 誰も一つも食べなかった。
 b'. amwu-to han kay-to mek-ci anh-ass-ta.
 誰 も 一つ も 食べ なかった
 「誰も一つも食べなかった。」
- c. yeki-nun w-uli-pakk-ey amwu-to eps-ta.
 ここは 私たちしか 誰 もいない
 「ここは私たち以外誰もいない。」 (=13b)
- d. kemi-pakk-ey amwukes-to eps-ess-ta.
 クモ しか 何も いなかった
 「クモ以外何もいなかった。」 (=13c)

e. talo-pakk-ey amwukes-to mek-ci anh-ass-ta.

太郎 しか 何 も 食べ なかった

「太郎だけ何か食べ、他の人は何も食べなかった。」

(=13d)

(34a) (34a')は「誰も/awmu-to」と「何も/amwukes-to」が、(34b) (34b')は「誰も/awmu-to」と「一つも/hana-to」が、(34c-e)は「pakk-ey」と「不定語 to」が単一の否定辞の下で共起しており、すべて適格な文である。¹⁶ また、韓国語の先行研究において (Kim (1998), Sells (2001), Kuno & Whitman (2004))、(34)の構文についてさまざまな議論がなされてきているが、認可のメカニズムについて問題点が残されていた。本稿は、(34)の下線部をNCIとして分析するならば、従来の先行研究における問題点が簡単に解決できると考える。すなわち、NCIは「多重否定一致現象」が可能であるため、統語的に単一の否定辞と「多重否定一致」をおこなうわけである。

一方、興味深いことに、「しか」は「pakk-ey」と異なる振る舞いを見せる。

(35) a. *ここは私たちしか誰もいない。 (= (14c))

b. *クモしか何もいない。 (= (14d))

c. *ジョンしか何も食べなかった。 (= (14b))

上記の(35)は「しか」が「不定語も」と共に用いられた文であり、(35a) (35b) (35c)はそれぞれ(34c) (34d) (34e)の「pakk-ey」文に対応する。「pakk-ey」と違い、「しか」は単一の否定辞の下で「不定語も」との共起が不可能である。これは、「しか」をNCIであると主張したNishioka (2000), Furukawa (2001)への反例である。

以上、第3節で提示したNPIとNCIを区別する五つのテストと、本節で提示したNCIであることを示す「多重否定一致現象」に関するテストの結果に基づき、日韓両言語におけるNCIの種類を次の(36)のように示す。

(36) 日韓両言語におけるNCIの種類 (*はNCIではないことを示す)

日本語	韓国語
a. *「しか」	「pakk-ey」
b. 「不定語も」	「不定語 to」
c. 「1CLも」	「1CLto」

(36b) (36c)は日韓両言語共にNCIの性質を共有する。一方、(36a)において「pakk-ey」はNCIであるのに対し、「しか」はNCIの性質を持っていない。これは、従来多くの先行研究で (Nam (1994), 洪 (2002) など)、「しか」と「pakk-ey」を全く同一の表現として扱ってきた分析に反するものである。¹⁷

5. おわりに

本稿では、日韓両言語の先行研究における NPI としての分析に対して、NCI として分析するのが妥当であることを主張した。また、「しか」を NCI として分析した先行研究の問題点を指摘し、日韓両言語の NCI の種類は上述の (36) であると述べた。

上記の主張の根拠として、本稿では Vallduví (1994), Giannakidou (2000), Watanabe (2004) によって提示された NPI と NCI を区別する五つのテスト (①否定文ではない文に現れるか否か、②主語位置に現れるか否か、③「ほとんど」によって修飾されるか否か、④問答として省略表現が現れるか否か、⑤同一節内条件が現れるか否か) と、本稿で採用した NCI の特性を有するかを判断するテスト (「多重否定一致」が許容されるか) の結果を示した。

今後の課題として、まず「しか」に関する問題点が残されている。「しか」は、NPI と NCI を区別する五つのテストにおいて NCI としての振る舞いを見せるにもかかわらず、「多重否定一致現象」を許さない。この現象がなぜおこるのかということに関しては、現時点で有力な議論をおこなうことができない。二つ目は、日韓両言語の否定と呼応する副詞「決して、kyelko」の研究が残っている。ロマンス語系の NCI は、例えば西フランマン語のいわゆる N-words (Niemand (誰も)、Niets (何も)、Nieverst (どこにも)、Nooit (決して)) のように分類しやすいのに対し、日韓両言語は音が一致しないためその分類は簡単ではない。当該要素に対応する西フランマン語のようなロマンス語系の N-words は NCI と分析されるが、「決して/kyelko」は音韻的な理由により NCI として一見分析しづらい。しかし、「決して、kyelko」は「多重否定一致」が起こる点さらに否定文ではない文に現れない点という NCI の性質を持っていると考えられる。また、注 14 でも述べたように、日本語と韓国語以外にトルコ語においても今まで NPI として分析されてきた表現が実際に NCI の特徴を持っていた。このように実は「否定一致現象」が現れる言語なのに間違えて NPI として分析されているさらなる言語間の対照研究を進めたい。

【注】

- 1 韓国語のローマ表記は、Samuel E. Martin による Yale 式 (The Yale Romanization System) にしたがっている。先行研究 (Nam (1994)、洪 (2002) など) では「しか」と「pakk-ey」をまったく同列に扱っているが、本稿においては、両者は同一の表現ではないと考える。両者の相違点については後の第 4 節で述べる。これから便宜上、「しか」の対応表現として「pakk-ey」を用いる。
- 2 研究者によって、「wh + mo」、「不定詞 + も」などさまざまな用語が存在する。本稿は片岡 (2004) にしたがって、「不定語も」とする。
- 3 韓国語の否定文の形式は大きく三つ (長型・短型・語彙否定文) に分けられる。それぞれの否定文の説明を以下に簡単に述べておく。まず、「太郎がりんごを食べなかった」の例文をもって長型否定文と短型否定文を見る。(Nom- 主格助詞、Acc- 対格助詞)
 - (i) a. 長型否定文: talo-ka sakwa-lul mek-ci ani-ha-yess-ta.
talo-Nom apple-Acc eat-Comp Neg-do-Past-Decl
 - b. 短型否定文: talo-ka sakwa-lul an mek-ess-ta.
talo-Nom apple-Acc Neg eat-Past-Decl

(i a) の長型否定文において、否定辞は動詞の後ろにあり、(i b) の短型否定文において、否定辞は動詞の前にある。また、(i a) の長型否定文の否定辞は接辞の「ci」に後接し、この否定辞には英語の do 挿入 (support) のような hata (する) が後接する。一方、(i b) の短型否定文において、否定辞は動詞の前にあり、長型否定文のような特徴は見られない。(i a) と (i b) の大きな違いは否定辞の位置である。こうした特徴のため、先行研究において、長型否定文と短型否定文が同義 (Park (1996) など) か、異義 (Han (1995) など) かという問題について数多くの議論がある。これについてはさらなる研究が必要であると思われるが、本稿においては、長型否定文と短型否定文において、NPI が主語位置でも目的語位置でも現れる点と、その容認度が変わらない点 (具体的な例文は省略する) で、同義とみなし、便宜上、長型否定文のみ扱うことにする。

最後に、語彙否定文についてみる。以下の (ii) のように語彙否定文には (i) でみた否定辞の「an」が存在しない。つまり、語彙自体否定的な意味を持つ。

- (ii) 語彙否定文: a. talo-ka eps-ta.
 talo-Nom not exist-Decl 「太郎がいない。」
 b. talo-ka molu-ta.
 talo-Nom not know-Decl 「太郎が知らない。」

語彙否定が可能となる動詞は上の二つの動詞 (eps-ta (いない)、molu-ta (知らない)) のみである (Sells (2001))。

4 本稿での c-統御の定義は (i) とする。

(i) 節点 A と節点 B のどちらも他方を支配せず、A を支配する最初の枝分かれ節点が B を支配するならば、A は B を c-統御する。 (Reinhart 1976)

5 この主張に対し、片岡 (2004) の「[しか][不定語も]は否定辞によって c-統御されるのではなく、それらが否定辞を c-統御する」という見解もある。詳しい内容は片岡 (2004) を参照されたい。

6 Haegeman (1995: 107, (81)) は否定演算子 (Neg-operator) に関して以下のように定義している。

- (i) a. NEG-operator : a NEG-phrase in a scope position;
 b. Scope position : left-peripheral A'-position (an XP-adjoined position or a specifier position).

7 「any」は否定文だけではなく、疑問文や条件文においても現れうる。この事実を Klima は Neg, Wh が [+affective] という素性を持った要素だと仮定することで説明している。すなわち、否定文や Wh 疑問文という環境においては、この素性が存在することによって「some」が「any」に変わると説明する。これに関する詳しい内容は Klima (1967) を参照されたい。

8 Nam (1994) は日本語の「しか」と「不定語も」も韓国語と同じく、「最強 NPI」と述べている。

9 (Kaist-番号): 番号は、Kaist コーパスの例文番号である。なお、作品の出典については、『CD-ROM 版 대한민국 국어 정보베이스 II (大韓民国国語情報ベース II) For Evaluation Only98.12』Kaist (Korea Terminology Research Center for Language and Knowledge Engineering, 韓国科学技術院・専門用語言語工学研究センター) を参照されたい。

10 Nishioka (2000) はこの類の構文は許容されると述べているが、多くの先行研究と筆者がおこなった 50 人のインフォーマント調査によると (14b) は非常に不自然な文と判断される。

11 この「しか」の制約の理由については諸説あるが、Aoyagi and Ishii (1994: 299-300) は以下のように主張している。

(i) SIKANPI is an agreement-inducing element licensed by Spec-head agreement with Neg at LF.

12 日韓両言語は主要部が後ろにくる言語であるため (Head-final language)、上記の特徴は当たり前に見えるかもしれない。しかし、動詞の後に主語が現れるロマンス系の言語においても NCI は主語位置に現れる (Watanabe (2004: 563))。

13 本稿の 2.1 節で NCI は「否定の意味を担う表現」であると述べたが Watanabe (2004) はこの省略表現の現象に注目し、この現象は「不定語も」が NCI であることを示唆するもっとも有力な証拠であると主張する。(21a) の答えで省略されている部分を補うと、(i) のようになる (線で消してある部

分が省略されている部分である)。

(i) 何も見なかった。(同：(18b))

Watanabe は上記の省略の仕方に注目する。省略できるのは、コンテキストから復元可能なものだけであることを考えた場合、否定は (21a) の質問に含まれていない。また、(21a) の質問に対する答えとして (ii) も可能であるが、そこで省略されているのは「見なかった」ではなく、「見た」である。すなわち、否定が含まれていないわけである。

(ii) へびを見た (*見なかった)。(同：(20) を一部改変)

Watanabe は、(ii) に対し、「不定語も」が否定の意味を担っている [+Neg] 素性を持ち、この「不定語も」が否定辞と否定一致を起こし、前述の (9) の二つの操作を経るからであると主張する (これより詳しい内容は Watanabe (2004) を参照されたい)。

- 14 さらに、トルコ語の NPI として分析されてきた「hiçkimse (誰も)、hiçbirşey (何も)」において、筆者がトルコ語の母語話者三人にインフォーマント調査をおこなった結果 (便宜上、そのデータは省略する)、上述の (16) (17) の NCI としての五つの特徴がトルコ語の「hiçkimse, hiçbirşey」にも得られた。また、後の第 4 節で見る「多重否定一致構文」においてもトルコ語は日韓両言語と同様の振る舞いをみせる。これはトルコ語も日本語と韓国語のように「否定一致現象」が現れる言語であることを示唆する。
- 15 基本的に先行研究とコーパスから日韓両言語の用例を引用しようとしたが、例文がなかった時は、やむを得ず筆者が作例してインフォーマント調査をおこなった。言語学を専攻とする日本語と韓国語母語話者各 50 名を対象に、調査をおこなった。しかし、インフォーマントを選定する際、方言、年齢、性別などを問わずに任意に選んだ。
- 16 しかし、ここで一つ疑問点が浮かびあがる。「1CL も /to」、「pakk-ey」および「1CLto」と「pakk-ey」は、一つの否定辞の下で共起しにくい。

(i) a. ?? 一人も一つも食べなかった。

a'. ?? han-salam-to hana-to mek-ci anh-ass-ta.
一人 も一つも 食べ なかった
「一人も一つも食べなかった。」

b. ?? talo-pakk-ey sakwa-pakk-ey mek-ci anh-ass-ta.
太郎 しか りんごしか 食べ なかった
「りんごだけ食べたのは太郎だけだった。」

c. * yeki-nun w-uli-pakk-ey hansalam-to eps-ta.
ここは 私たちしか 一人 も いない
「ここは私たち以外誰もいない。」

この問題点について Watanabe (2004), Kim (2005) は何も触れていない。この理由について、本稿においても現時点で有力な議論をおこなうことができないが、今後の研究の展望として Nishioka (2000) の仮説が役に立つと考えられる。Nishioka は「しか」の分析において、「しか」は [Spec, NegP] で認可が終わった後で、[Spec, FocP] でさらに移動しなければならないと仮定する。本稿は Nishioka の仮説に基づき、「1CL も /to」と「pakk-ey」は [Spec, NegP] で否定辞との認可が終わってから、さらに [Spec, FocP] へ移動しなければならないと仮定すれば上記の (i) の問題点が解決されと考えられる。すなわち、[Spec, FocP] において、「FocP」の「Spec」には一つの要素のみが位置するため、もう一つの要素は処理できないわけである。これに対し、「不定語も /to」は否定辞との認可の後、[Spec, FocP] へ移動しないため、(34a) (34a') (34b) (34b') のように自由に共起できると考えられる。しかし、「不定語も /to」がなぜ [Spec, FocP] へ移動しなくてもよいかという問題については現時点では不明である。これに関する具体的な研究は今後の課題として残したい。

- 17 本稿の主な目的は日韓両言語において (36) の表現が NCI であることを主張することであり、「なぜ「しか」と「pakk-ey」の性質が異なるか」という問題については稿を改めて論じたい。

【参考文献】

- Aoyagi, Hiroshi and Ishii, Toru (1994) On NPI Licensing in Japanese. *Japanese/Korean Linguistics* 4. pp.295-311. CSLI Publications.
- Chung, DaeHo and Park, HongKeun (1997) NPIs Outside of Negation Scope. In Ho-Min Sohn and John Haig (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 6. pp.415-435. Stanford, CSLI Publications.
- Furukawa, Yukio (2001) A Negative Concord Approach to SIKI-NAI Construction. 『日本語学会第123回大会予稿集』 pp.164-169, 日本語学会.
- Giannakidou, Anastasia (2000) Negative...Concord? *Natural Language and Linguistic Theory* 18, pp.457-523.
- Haegeman, Liliane and Zanuttini Raffaella (1991) Negative Heads and Neg Criterion. *The Linguistic Review* 8. pp.233-252.
- Haegeman, Liliane (1995) *The Syntax of Negation*. Cambridge University Press.
- Haegeman, Liliane and Zanuttini Raffaella (1996) Negative Concord in West Flemish. *Parameters and Functional Heads: Essays in Comparative Syntax*. ed. By Adriana Belletti & Luigi, Rizzi. pp.117-179. Oxford University Press.
- Kato, Yasuhiko (1985) *Negative Sentences in Japanese*. Sophia Linguistica 19, Monograph. Sophia University.
- Kato, Yasuhiko (2000) Interpretive Asymmetries of Negation. L. Horn and Y. Kato (eds.) *Negation and Polarity*. pp.62-87. Oxford University Press.
- Kato, Yasuhiko (2002) Negation in English and Japanese: Some (A) symmetries and their Theoretical Implications. *Proceedings of the Sophia Symposium on Negation*. pp.1-21. Sophia University, Tokyo.
- Kawashima, Ruriko and Kitahara, Hisatsugu (1992) Licensing of Negative Polarity Items and Checking Theory: A Comparative Study of English and Japanese. *Proceedings of the Formal Linguistics Society of Midamerica* 3. pp.139-154.
- Klima, Edward S. (1964) Negation in English. J. Foder and J. Katz (eds.) *The Structure of Language*. pp.246-323. Prentice-Hall.
- Kuno, Susumu (1995) Negative Polarity Items in Japanese and English. *Harvard Working Papers in Linguistics* 5. pp.165-197.
- Kuno, Susumu and Whitman John B. (2004) Licensing of Multiple Negative Polarity Items. In Young-Key Kim-Renaud and John Whitman (eds.), *Kuno in Korean Linguistics*, Seoul. pp.207-228.
- Nam, SeungHo (1994) Another Type of Negative Polarity Item. In M. Kanazawa and C. Pinon eds. *Dynamics, Polarity, and Quantification*. pp.3-15. Center for the Study of Language and Information, Stanford.
- Nishioka, Nobuaki (2000) Japanese Negative Polarity Items Wh-MO and XP-sika Phrases: Another Overt Movement Analysis in Terms of Feature-Checking. K. Takami, A. Kamio and J. Whitman (eds.) *Syntactic and Functional Explorations: In Honor of Susumu Kuno*. pp.159-184. Kurozio Publishers.
- Reinhart, Tanya (1976) *The Syntactic Domain of Anaphora*. Doctoral dissertation. MIT.
- Sells, Peter (2001) Negative Polarity Licensing and Interpretation. In S. Kuno et al. (ed.). *Harvard Studies in Korean Linguistics*, Vol. 9. pp.3-22. Dept. of Linguistics, Harvard University.
- Vallduví, Eric (1994) Polarity Items, N-words and Minimizers in Catalan and Spanish. *Probus*. 6. pp.263-294.
- Watanabe, Akira (2002) Feature Checking and Neg-Factorization in Negative Concord. *Proceedings of the Sophia Symposium on Negation*. pp.51-77. Sophia University, Tokyo.
- Watanabe, Akira (2004) The Genesis of Negative Concord. *Linguistic Inquiry* 35. pp.559-612.
- 片岡喜代子 (2004) 『日本語否定文の構造：かき混ぜ文と否定呼応表現』九州大学言語学博士論文。
- 松井晴子 (2003) 「日本語否定文の構造：否定極性項目の認可を中心に」筑波大学大学院人文社会科学研究所 修士論文。

- 茂木俊伸 (2004) 『とりたて詞の解釈と構造』筑波大学大学院人文社会科学研究所 筑波大学博士 (言語学) 論文.
- 渡辺 明 (2005) 『ミニマリストプログラム序説』大修館書店.
- 김 영화 (Kim, YoungWha, 2005) 의 (他) 「부정어의 구조·의미적 분석 (否定語의 構造·意味的 分析)」 『부정과 부정어 (否定と否定語)』 pp.1-40, 한국문화사 (韓國文化社).
- 김 영희 (Kim, YengHuy, 1998) 「부정 극성어의 허가 양상 (否定極性語의 許可樣相)」 한글 (한글), pp.263-297.
- 박 정규 (Park, CengKyu, 1996) 『국어부정문연구 (國語否定文研究)』 보고사 (Bogosa).
- 한 학성 (Han, HakSeong, 1995) 『생성문법론 (生成文法論)』 태학사 (太學社).
- 洪 思滿 (2002) 『한일어 대조분석 (韓日語對照分析)』 역락 (亦樂).

【用例出典】

日本語の用例

『朝日新聞オンライン記事データベース「聞蔵 (きくぞう)」DNA for Libraries』

韓国語の用例

【CD-ROM 版 대한민국 국어 정보베이스Ⅱ (大韓民國國語情報ベースⅡ) For Evaluation Only98.12】
KAIST (Korea Terminology Research Center for Language and Knowledge Engineering, 韓國科學技術院・專門用語言語工學研究センター) → (<http://csfive.kaist.ac.kr/kcp/>)

付 記

本稿は、関東日本語談話会第 84 回 (2006 年 1 月 27 日於学習院女子大学) における口頭発表の一部をもとに加筆・修正を施したものである。席上、貴重なお意見をくださった多くの方に感謝申し上げる。

(パク カンフン 筑波大学大学院博士課程 人文社会科学研究所 応用言語学)